



## 大澤正己

### はじめに

- ①列島内で出土する弥生鉄製品の実態
- ②弥生時代から古墳時代へかけての鍛冶
- ③韓国製鉄・鍛冶について

### まとめ

### [論文要旨]

列島内の縄文時代晩期から弥生時代へかけての初期鉄文化は、中国東北部方面で生産された可能性の高い高温還元間接製鋼法にもとづく可鍛鋳鉄、鍛鉄脱炭鋼、炒鋼の各製品の導入から始まる。また、遺存度の悪い低温還元直接製鋼法の塊鍊鉄も希れには発見されるが、点数は少ないと錆化のためか、その検出度は至って低い。

一方、弥生時代の鍛冶技術は、まだ稚拙であって原始鍛冶とも呼ぶべき状況にある。まず廃鉄器（铸造鉄斧脱炭品破片）の砥石研磨再生から始まり、次に棒（条材）、板の半製品を原料とした繋切り、火炙り成形、砥石研磨による鉄器製作である。鍛冶素材の产地は、弥生時代後期前半頃までは中国側、後期中頃以降は、鉄生産の開始された朝鮮半島側に依存した形跡を残す。

本格鍛冶となる羽口使用で、沸し、素延べ、火造りといった工程の開始は古墳時代の前期頃で、鉄鉱石・砂鉄原料の製鍊開始は古墳時代中期以降まで待たねばならぬ。朝鮮半島側の製鍊の開始は定かでないが、焙焼磁鉄鉱を原料とした石帳里遺跡のA・B区で3~5世紀の操業があり、更に遡るのは確実であろう。これに後続する遺跡として沙村製鉄遺跡が調査された。いずれも円形炉で、列島内の古墳時代後期に属する遺構が広島、岡山の両県でも検出されている。但し、列島内では大口径羽口（送風管）を伴わないので同系とみなすには議論の分かれる事となろう。列島内の円形炉は、砂鉄と鉱石の2通りの原料使用があり、焙焼技術は受継がれている。